

てんじんやといせき

天神谷戸遺跡

(二宮町 No.58遺跡)

調査期間 20110116～20110315

所在地 中郡二宮町二宮字小門

時代
古墳
奈良・平安
中世
近世



概要

天神谷戸遺跡の今回の調査は、国土交通省関東地方整備局の依頼による新しい横浜地方法務局小田原支局庁舎の建設に伴う事前の発掘調査として実施されました。遺跡は中郡二宮町の東南部、大磯丘陵の南端部に位置し、JR東海道線二宮駅から北北東へ約700mにあります。また遺跡は南西方向に開口する谷戸にあり、平成9年度の第1次調査の際に遺跡名は谷戸の東奥に祀られていた天神社から天神谷戸遺跡と名付けられました。なお今回の調査区は標高20m程を測り、前回の調査区の南西に近接し、その最短距離は約15mを測ります。

今回の調査の結果、近世では溝状遺構2条と井戸址1基が発見され、磁器や銭貨が出土しました。中世では井戸址2基が発見され、そのうちの1基から多量の礫の充填が確認され、井戸廃絶に伴う石入れ行為のあったことがうかがえました。奈良・平安時代では溝状遺構5条が発見され、切り合いによる新旧関係と走行方向のあり方により東西及び南北の方位にほぼ一致する2条は他の3条よりも新しく、この2条の東西南北の方位に一致するあり方により、条里制の施行による土地利用の影響が少なからず背景にあった可能性がうかがえました。古墳時代では溝状遺構3条と水田状遺構1箇所が発見され、水田状遺構は畦畔(けいはん)状の高まりや被覆土、作土、床土等の発見により水田であると推定されました。この水田状遺構は、前回の調査で発見された5世紀末～6世紀初頭の竪穴建物より想定される居住域との位置関係から当該期の集落における生産遺構であった可能性があります。今回の調査で本遺跡は、居住域と水田面が広がる古墳時代の集落としての一端が浮き彫りになった一方で、前回の調査で不明であった本集落の生業が、漁撈ではなく農耕を基盤としている可能性が示唆されました。



▲遺跡遠景



▲溝状遺構(近世)



▲水田状遺構(古墳時代)

